

漢法苞徳塾資料	No. 156
区分	臨床各論
タイトル	診断セミナー・1
著者	八木素萌
作成日	1997.02.15

◎東洋医学の陰陽五行論は、実は非常に広汎で深い奥行のある論であり、また複雑多岐に渡った論である。その論は漢法医学全般を貫いている。幸いな事に、これを「五臓色体表」として整理されているので、煩雑な五行論を診断と治療に運用し易くなっている。

触診（八虚診、募穴・腧穴診、腹診－臍傍診その他、背候診、経脈切診など各種の触診法を用いて）の結果、三因では「外感病」、諸反応では「木」と「金」と「火」とが複合的に触知された。

顔形では「金」に相当しており、顔色には煤けたような垢ついたような色が混ざっておって（「水」の問題を示す）いる。しかも普段に比べて少し赤黄色気味も見え（熱・「火」の反応）、ややのぼせている様子である。

尺膚には「数」と「急」が見られた。履患したのは「秋たけなわ」の頃である。

◇診断としては、次のうち何れが適当な判断か？解答しなさい。（正しいものに○印をつけよ）

- 病因は「木」・病んでいる臓腑は「金」・やや長引いている為か、仕事の条件の為に「水」にも影響が現われているが、微熱が籠っているのが「火」反応となっているもの。
- もともと「肺」「腎」に問題を持っていたものが、「木」邪に入られていて、春の「温病」的要素が作用している為に「火」の反応も見られるのである。主な病臓は「金」＝肺である。
- 「金」が「微邪」である「木」に入られた。尺膚には濡滑が現られていないので、顔色にある「水」の反応は、「相生的」には「母」である「金・肺」からの影響を「水・腎」が受けている表現と見られ、「腎」が病んでいる表現と解さない方が適当であろう。病臓腑は「金・肺」である。「微邪」であるから、割合に直りにくいので熱が籠ると言う「火」反応も現われていると見られる。
- 秋であるので時邪は「金」である。それが「木」を剋したので熱が籠ることになっているのが「火」反応として現われている。「水」反応と言うのは「金→水」の関係と「水→木」の関係で、共に「相生的」に「水」があるから「水」反応が見られても、何の不思議もない。

◎討論の結果

- A……出題には、診断項目的にみて、記述上においても、不十分と思われる。故に、触診・望診チェック表にあるように、その全項目について明快に記入して欲しかった。例えば、八虚診では「木」と「水」、臍傍診では「金」と「相火」「木」、『難経』型腹診では「金」「木」「土」、塾一般型腹診では「木」「金」「土」、侯背診では「木」「金」「土」などのように記入されていれば、かなり判断しやすくなる。また、診察日の記述も欲しいし、舌診の判断なども是非記入して欲しかった。以上が指摘された。
- B……脈診・尺皮診は、ともに病態を非常に良く表現しているものである。脈診における「三陰三陽」名は「経脈を表現している」と言う説や、「臟腑経脈を表現している」と言う論や、「陰陽の消長を表現している」と言う説などが見られる。
- C……傷寒病と温病の相違の問題